

〒260-0013

千葉市中央区中央3-13-17

TEL&FAX:043-223-7807

代表:小西 由希子

E-mail:hello@ceic.info, Home Page:http://www.ceic.info/

2005. 2. 7 発行 ニュースレター第 91 号

楢葉の白鳥現象とは

福島県の浜通り、楢葉町にたまたま調査に行った折、小さな堤に 600 羽以上の白鳥が越冬していました。聞くと 1 日、この堤にいて、1 日 2 回の餌を待っているのんびりしていると聞きました。餌付けは町役場が、〇〇補修費(?)の名目で予算化し、選任の職員が米を主体に餌を撒いていました。見学者は殆ど来ません。実は、福島県だけで 1 万羽近い白鳥群が、60ヶ所ほどで越冬しています。福島県下では、餌や人件費で年間 2 億円を軽く超している模様ときいています。

そこではっとしました。白鳥が人間を利用しすぎて、白鳥固有の生き方を失った状態だと、思わず気が付きました。千葉県でも本埜村の白鳥群がよく似た状態だとも。この過重な餌付けによる、生き物の自立喪失は、戦後の日本の文化の反映ではないかとも考えています。私はこの状況を「楢葉の白鳥」現象と呼び、問題を指摘してきました。

まず、日本に渡来する白鳥群は極めて頭が良く、人間を徹底的に利用している生き物であると認識して下さい。ペットで言うと、猫では無く犬に近い。寿命は野生状態では平均 10 年程度、しかし餌付けされた個体群では 18 年~20 年とされています。餌付けされた白鳥群では、野生群と比較しても、繁殖率は異常に高く、千葉県本埜村の個体群も、いまやネズミ算的な増え方に入っていると見ています。

餌付けは日本では戦後、それも最近の風潮です。戦前は鴨場のごとく狩猟の目的のため等以外での餌付けはされていなかったと思います。

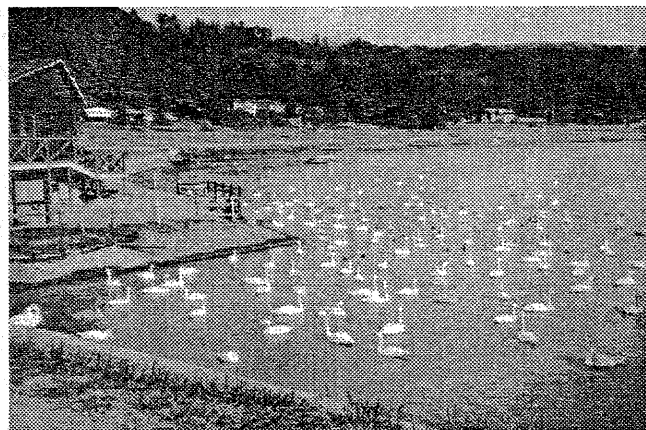
まず、餌付けされた白鳥の親は、シベリアに北帰繁殖し、夏の終わり頃、ようやく飛べるようになった幼鳥を引き連れて、10 月 15 日~20 日頃、越冬地まで一気に南下飛来します。本来、白鳥は日本での越冬地の半年間、幼鳥に餌のある場所、餌の取り方、食べられるもの、駄目なもの、タヌキや鷺、犬等からの危険の避け方、仲間との付き合い方などを、付きっきりで教育します。また、親になれるまで 3 年間、家族群として毎年、親と行動を共にすると言われ、しっかりと親の行動を見ているといわれています。また、半年後北帰するまでには幼鳥は越冬地を故郷としてしっかりと認知します。

ところが餌付けされた親は、生きる手段を人に託し、1 日中越冬地に留まります。子どもに何も教えません。1 日 2 回の餌を待って、寝たり起きたりの生活です。

俗に言う「食糧提供の生活で、栄養満点、体力増強

東京都文京区 荒尾 稔

おいしいものしか食べなくなります。当然、そのような親の幼鳥は、餌の取り方も、餌場も、本来の危険さえも経験しないまま、4 年目には親となって幼鳥を同行してきます。何も知らないままに親になった白鳥は当然、親と同じで、人に命を託します。子ども達に何も教えられません。原体験がないからです。



楢葉の白鳥 (左は白鳥観察小屋)

問題はここです。人間を徹底的に利用しすぎて、白鳥の本来の生活者としての生き方を無くした、白鳥文化を台無しにしてしまった状態と言っても良いと思います。人のペットの犬と同じくらいで、ライフサイクルが人の 3 倍早く、それ故に、私も親子 3 世代以上の観察で「楢葉の白鳥現象」に気が付きました。

日本の子ども達の実情を見ていると、餌付けされた白鳥群は、いまの学校の先生や、教わる生徒達と重なりませんか。日本の文化喪失の実態、生き方の原体験の不足、日本文化への関心の薄さなど、日本の今の社会現象の中に「楢葉の白鳥」現象が随所に見られます。問題の本質はここにあると思っています。

今年 5 月開催予定の「第 2 回里山シンポジウム」の実行委員会では、私どもの情報の発信先たる中心を、「子ども達の親の世代へ向かって、絞り込んで行こう」ということになりました。サブテーマ「里山と子ども一親に継承える(つたえる)昔体験」へとつながる話だと考えています。

でも、この現象にも宮城県や山形県、新潟県では、すでに人との共生の定着のなかで、自然に解消が進んでいます。白鳥にとっては、一時的な現象といっても良さそうだと分かってきました。正直、ホットしています。それは人の自立した生き方への重大なヒントを与えてくれています。